

# アスパラガス産地の生産拡大への支援

## ■ 大川地区アスパラガス部会 ■

(東讃農業改良普及センター 間嶋悠人)

### ●対象の概要

大川地区(東かがわ市、さぬき市)では、水稲との輪作によるブロッコリーや青ネギ等の野菜栽培が盛んで、施設野菜のアスパラガスやミニトマトも水田転換作物として定着している。アスパラガスについては、県オリジナル品種「さぬきのめざめ」を中心に栽培されており、香川型高畝疎植栽培法が導入され、作業の省力化が図られていることから、収益性が高く、キクやイチゴの中古ハウスを活用した品目転換などにより新規栽培者が増加するなど、産地としての生産が拡大しており、今後の一層の発展が期待されている。

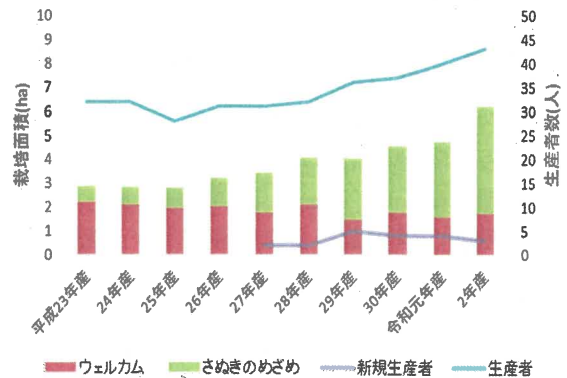
### ●課題を取り上げた理由

大川地区のアスパラガス栽培は平成26年頃から拡大傾向にあり、5年前と比べて生産者数が1.3倍の43名、栽培面積は1.8倍の6.1haに増加している。特に新規栽培者の多くは香川型高畝疎植栽培法で栽培しており、「さぬきのめざめ」は全体の7割を占めている(図-1)。新規栽培者の増加の要因として、作業性の向上や安定した価格による収益性などがあげられる。

アスパラガスは植え替えることなく、10年以上同じ株を利用して栽培するため、自分のほ場条件にあわせた栽培管理の実施が重要であるが、新規栽培者を中心に技術・知識不足による病害虫の発生や、かん水不足による収穫量の減少などが見られ、課題となっている。

新規栽培者が今後も増加し、産地の拡大を図っていくためには、栽培技術を習得しやすい環境が整えられ、安定した生産ができ、所得が確保される必要がある。また、既存栽培者がアスパラガスを基幹作物として経営を維持していくためには、作業の効率化による規模拡大と収量の確保が重要である。

このため、新規栽培者の栽培技術の習得、計画的作業の推進および収量向上に向けた夏季のかん水管理技術の検討に取り組んだ。



※新規生産者：平成26年以前はデータなし

図-1 大川地区におけるアスパラガスの栽培面積と生産者数の推移

### ●普及活動の経過

#### 1 新規栽培者への支援

新規栽培者が早期に技術を習得するためには熟練生産者や普及員などが現地で直接指導し、体験することが重要と考え、JAや農業試験場と協力して、新規栽培者を対象とした現地講習会を年間2回(立茎、夏季の管理)開催した。また、部会員を対象とした年間3回の講習会では写真を多く用いた資料を活用して、栽培管理のポイントを指導し、定期的な個別巡回も行うことで技術や知識の確認、問題や悩みの聞きとりなどを行った。



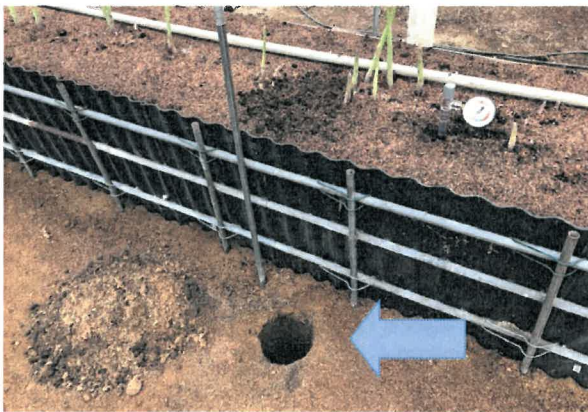
現地講習会

## 2 計画的作業の推進

アスパラガスでは、年間9か月ほど収穫期間があり、収穫以外に伏込みや立茎、病虫害防除など長期にわたって計画的な作業が必要である。そのきっかけづくりとして、特に病虫害防除に注目して、前年の防除履歴や病虫害の発生状況から反省点を個々に面談で確認した後、次年の防除改善計画を作成した。また、作業計画や作業記録の記帳を講習会や個別巡回の機会を捉えて促した。

## 3 かん水管理技術の検討

収量が2.5t/10a以上の優良ほ場と2t/10a未満のほ場を各2か所選定し、土壤水分の経時的変化を測定した。その結果、収量が低下する原因の1つとして夏季の土壤水分の過不足が考えられた。また、土壤水分と地下水位の関係についても確認するため、通路に深さ40cmの縦穴を掘り、観察した。農業試験場においても同様の調査を依頼し、得られたデータを比較しながら、生産者や農業試験場と最適な管理方法について検討した。この結果をとりまとめ、個別巡回での夏季のかん水指導の目安として活用した。



地下水位を確認するための通路の縦穴

## ●普及活動の成果

### 1 新規栽培者への支援

現地講習会や巡回を通じて、新規栽培者相互や先進農家とのつながりができたことで、農家自らが情報交換を容易にできるようになり、問題の把握や解決策を見いだすことが素早く行える環境をつくることができた。

### 2 計画的作業の推進

防除に関しては、今年度は害虫の発生が平

年より多かったが、予防的な防除により比較的発生を抑制することができた。個別に年間の防除計画を相談することで、防除以外の作業についても見直す機会となり、作業計画や記録の作成が増え、自らの栽培やほ場の課題について考える生産者が増加した。このようにPDCAサイクルを実践して、作業の改善を図ることで生産性の向上につながった。

### 3 かん水管理技術の検討

収量が高いほ場では、土壤水分がかん水によって比較的大きく変化するが、通路の縦穴はかん水後でも水が溜まらないか、水位が上昇してもすみやかな低下が見られた。また、多くのほ場で畝上部と比べて下部が乾いていることが明らかとなった。

通路の縦穴は、高畝栽培を行う生産者の約8割で設置され、実際に地下水位を確認できるようになったことで、これまでの勘に頼るかん水管理ではなく、生産者自身がかん水の過不足を判断することができるようになった。その結果、ほ場条件に合ったかん水管理の改善が図られ、7割のほ場で前年に比べて夏季の収穫量が増加し、重点的に指導したほ場では2割増加となった。

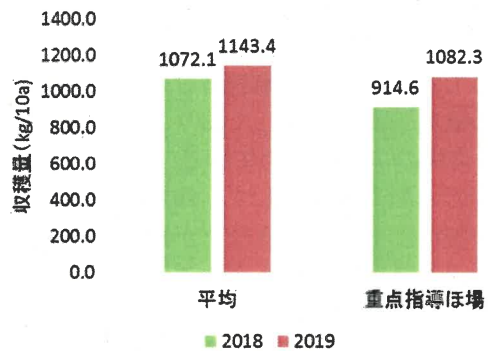


図-2 縦穴設置ほ場における夏季(6~10月)収穫量の推移

## ●今後の普及活動の課題

現在、栽培希望者が5名おり、今後も生産者が増加する見込みであるため、重点的に支援していく計画である。また、規模拡大にあたっては補助事業等の活用に加えて、定植や収穫、残渣処理などの作業支援の要望が強まっているので、関係機関と協力して農福連携による作業支援体制の構築にも取り組むこととしている。